

主の戦いに必要な資格

2010.1.12(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

申命記 20章1節から8節

あなたが敵と戦うために出て行くとき、馬や戦車や、あなたよりも多い軍勢を見ても、彼らを恐れてはならない。あなたをエジプトの地から導き上られたあなたの神、主が、あなたとともにおられる。あなたがたが戦いに臨む場合は、祭司は進み出て民に告げ、彼らに言いなさい。「聞け。イスラエルよ。あなたがたは、きょう、敵と戦おうとしている。弱気になってはならない。恐れてはならない。うろたえてはならない。彼らのことでおじけてはならない。共に行って、あなたがたのために、あなたがたの敵と戦い、勝利を得させてくださるのは、あなたがたの神、主である。」つかさたちは、民に告げて言いなさい。「新しい家を建てて、まだそれを奉獻しなかった者はいないか。その者は家へ帰らなければならない。彼が戦死して、ほかの者がそれを奉獻するといけないから。ぶどう畑を作って、そこからまだ収穫していない者はいないか。その者は家へ帰らなければならない。彼が戦死して、ほかの者が収穫するといけないから。女と婚約して、まだその女と結婚していない者はいないか。その者は家へ帰らなければならない。彼が戦死して、ほかの者が彼女と結婚するといけないから。」つかさたちは、さらに民に告げて言わなければならない。「恐れて弱気になっている者はいないか。その者は家に帰れ。戦友たちの心が、彼の心のようにくじけるといけないから。」

暮れにいろいろな兄弟姉妹から、はがきや手紙をいただきました。一人の姉は、次のように書いたのです。「今年(去年の話ですが)は、とても嬉しい年でした。みことばが、よりはっきりと私を照らしてくださいました。『心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。』このみことばは、今私の希望となりました。イエス様は、私を縄目から解き放ってください、楽にしてくださいました。長い間、わけのわからない歩みの者でした。みことばを素直に受け入れることのできない者でした。お許してください。イエス様は、私のためにも十字架にかかってください、そしてベック兄姉のところへ導いてくださった憐れみを心から感謝しています」と。

M兄弟、K姉妹は、みことばを書いて、それから一文章だけ付け加えてくださったのです。「祈りの足りなさを思わされています。主が勝利してくださいますように」。

また別の家族は、「集会の中にイエス様の愛が満ち溢れ、私たちがたくさんのお栄光を拝することができますように」。

今朝、玄関を開けて、S兄弟と話しました。彼が吉祥寺集会に来始めた頃、この集会は今まで通っていた教会とは違う、と思ったそうです。けれど、15年前、20年前の集会与現在の集会とは違います。そのことを多くの人たちは感じていないかもしれませんが、私の心の痛みです。（昔は、一年間で三百人くらいも洗礼に導かれたのです。）しかし、近年は二、三十人です。普通の教会でしたら、二、三十人バプテスマを受けたなら大成功なのです。しかし、この集会全体の上に昔のような祝福がないことを、認めざるを得ません。悲しいことです。

問題は誰のせいでしょうか。主のせいではないでしょう。主は変わりません。昨日も今日もいつまでも変わらないのは、私たちの主です。悩んでいる人々、絶望している人々が急に少なくなったということも有り得ないでしょう。もしそうだとするなら、既に救われている者の責任です。信じている者の無関心さ、祈りの足りなさこそが、その原因なのではないでしょうか。ですから、集会全体が悔い改めなければならないのではないかと思います。

現在、いろいろな問題がありますが、祈りの輪に入っている人が、六百十八人になりました。有り難いことです。ですからまだ希望があります。しかし、99パーセント以上の人々は、「どうしてそんなに真剣に祈らなければいけないのか」と分からなくても、公けに言えないのです。けれど最近多くの人たちが、「一緒に祈るようになった」、「聖書は生きたものとなった」、「私たちは元気になった」という証しを聞くときに、本当に感謝です。つまりみな一つになれば、祝福が溢れるばかりのものとなります。もしそうでないとすれば、大変です。

ですから、先週の日曜日に話したのです。

- ・今年こそ「刈入れの時」であり、「戦いの時」です。つまり戦いの連続ということです。
- ・また、「真心から主を礼拝する時」です。
- ・そして、今年こそ「眠りから覚めるべき時」です。パウロは、信じる者にそう書いたのです。未信者にではありません。『あなたがたが眠りからさめるべき時刻が来ています。』と。
- ・もう一つ、今年こそ「裁き」が「神の家から」始まる時です。どうしてかと言いますと、清められるため、また前よりも用いられるためではないでしょうか。

主のみこころは、いったい何でしょうか。主のみこころ、それは「人間の救い」です。主は、どのような人間であれ、無関心な態度をおとりになりません。例外なく、みな主の愛の対象です。悪魔の願いは、ちょうど逆でしょう。すべての人間が呪われることです。主のみこころは、すべての人間が真理を知るに至ることであり、悪魔の願いは、すべての人間が試みにあって誘惑され、間違った道に行くことです。

主のみこころと悪魔の願いは、このようにすべて対立しているので、あらゆるキリスト者は、戦いの中に投げ込まれているのです。

今司会の兄弟に読んでいただきました申命記 20 章 1 節から 8 節のみことばは、重大な戦いがどのようなものであるか、を指し示しているのではないかと思います。戦いのためにどのような者がふさわしくないかということも、はっきり書き記されています。

今朝は、二つのことについて一緒に考えたいと思います。

* 第一に、五つの大切な事実について。

* 第二に、戦いに行くことのできる資格のいろいろな要素、並びに、戦いに参加することのできないいろいろな理由について。

* 第一に、五つの大切な事実について。

1. 最初の事実は、キリスト者の生活は決して遊びごとではない、ということです。

つまりキリスト者の生活は、まずふさわしい歩み、或いはふさわしく歩むことでなければなりません。

よく知られているエペソ書 4 章 1 節から 3 節までお読みいたします。

エペソ人への手紙 4 章 1 節から 3 節

さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

キリスト者の生活は、競走として説明されています。

ヘブル人への手紙 12 章 1 節

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。

千九百何十年前に、このように励まされたのです。「自分のことばかりを考えたり、周りの人ばかりを見たりしないで、イエス様だけを目指して走る者だけが、この競走に勝つことができる」と書いてあります。

また、キリスト者の生活は、旅人や寄留者の歩みにもたとえられています。

ペテロは、よくこの表現を使いました。

ペテロの手紙・第一 2 章 11 節

愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。

主に従う兄弟姉妹は、寄留者、或いは異分子として、この世で歩まなければならない、

と聖書は語っています。これを一言で表現するなら、キリスト者の生活とは、結局「戦い」です。

私が卒業したある神学校の校長先生は、たびたび語ったのです。「もしあなたがたが、悪魔の憎しみを感じなければ、あなたがたの信仰は根本的に間違っています」と。本当にその通りです。私たちの戦い、格闘とは、血肉、即ち人間に対するものではありません。この目に見える世界に対するものではない、とパウロはエペソ書 6 章に書いたのです。
エペソ人への手紙 6 章 1 2 節

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

このような歩みをするためには、人間は自分自身の力に拠ることができません。ただ主の力に拠り頼む以外に方法はないのです。ただイエス様にお従いして歩む兄弟姉妹は、誰でもこの戦いの中に投げ込まれます。したがって悪魔の憎しみを感じることはない者は、確かに気の毒です。つまり用いられません。

2 . 第二に大切な事実は、兄弟姉妹の生活が、絶対的な力を持つ悪魔（サタン）に対する戦いである、ということです。

前に読んでいただきました申命記 20 章 1 節をもう一度読みましょう。

申命記 20 章 1 節

あなたが敵と戦うために出て行くとき、馬や戦車や、あなたよりも多い軍勢を見ても、彼らを恐れてはならない。あなたをエジプトの地から導き上られたあなたの神、主が、あなたとともにおられる。

主がともにおられるなら、確かに心配する必要はありません。言うまでもなく、敵は、私たちよりもはるかに強いのです。もちろん私たちの戦いは、今話しましたように人間に対する戦いではありません。敵は人間ではなく、悪魔です。悪魔に仕える悪霊たちです。ですから、パウロはエペソにいる兄弟姉妹たちにそのことをはっきり言ったのです。「私たちの戦い、格闘とは、人間に対するものではなく、悪霊に対するものだ」と。

聖書によると、三種類の敵が私たちに対決しています。

「この世」、この目に見える世界です。

「肉」、人間の思い、人間のわがままです。

「悪魔」

「この世」

聖書は次のように記しています。ヨハネ伝 17 章 14 節です。

ヨハネの福音書 17章14節

「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。」

聖書はまた、この世の友は神の敵である、とはっきり語っています。聖書の中で最も強い言葉の一つではないでしょうか。ヤコブ書4章4節です。パウロはよく、「愛する兄弟たち」という表現を使いました。ヤコブは信じる者に大変な言葉を使ったのです。「貞操のない人たち」と。

ヤコブの手紙 4章4節

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

この世との内面的な分離がなければ、本当に主との交わりにあずかることができません。

「肉」

パウロはガラテヤ地方にいる人々に、次のように書いたのです。

ガラテヤ人への手紙 5章17節

なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。

ここで「肉」とは、人間のわがままな意思のことを意味しています。自分のことばかりを考える人は、悪魔の奴隷、虜、したがって悪魔に捕らえられ、悪魔の虜になっている者に他なりません。

この世と肉を利用する「悪魔」です。

ですからペテロは、当時の信じる者に書いたのです。

ペテロの手紙・第一 5章8節

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのよう、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。

悪魔は日夜私たちを攻撃しようと隙をねらっています。

3. 第三の事実は、私たちが勝利者の側に立つことを許されている、ということです。

先に読みました申命記に戻りまして、20章3節からもう一度読みましょう。

申命記 20章3節、4節

彼らに言いなさい。「聞け。イスラエルよ。あなたがたは、きょう、敵と戦おうと

している。弱気になってはならない。恐れてはならない。うろたえてはならない。彼らのことでおじけてはならない。共に行って、あなたがたのために、あなたがたの敵と戦い、勝利を得させてくださるのは、あなたがたの神、主である。」

主なる神は、聖書の中で何百回も言われます。「恐れることはない。勝利者なるわたしはあなたがたとともに、あなたがたの代わりに戦っている」と。

敵は、決して想像上の偶像物ではありません。このような恐るべき敵の力のために恐れをなすことは、全く当然のことと言えましょう。しかし、ここで書かれています。

申命記 20章3節

彼らに言いなさい。「聞け。イスラエルよ。あなたがたは、きょう、敵と戦おうとしている。弱気になってはならない。恐れてはならない。うろたえてはならない。彼らのことでおじけてはならない。」

私たちは、「主とともに圧倒的な勝利者」となることを許されています。よく知られているローマ書8章の終わりのほうに書かれています。

ローマ人への手紙 8章37節

しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

もちろん主の恵みです。

4. 第四の大切な事実は、戦いの結果が私たちと主イエス様にかかっている、ということです。

勝利者なるイエス様は、器を求めておられ、その器を通してご自分の勝利を明らかになさることができるのです。そしてイエス様は、私たちのような者を「同労者」として用いようとしておられます。すべてはイエス様にゆだねられています。イエス様は、ご自分がお用いになることのできる兄弟姉妹、即ち全てを主にゆだねた兄弟姉妹を求めておられます。こんにち最も必要なのは、「主の同労者」です。

初代教会の人々は非常に恵まれた人々でした。それは、自分で頑張ろうと思わなかったからです。

コリント人への手紙・第一 3章9節前半

私たちは神の協力者であり、

とあります。

コリント人への手紙・第二 6章1節

私たちは神とともに働く者として、あなたがたに懇願します。神の恵みをむだに受

けないようにしてください。

「私たちは神とともに働く者である」とは、何という大きな特権ではないでしょうか。かしらなるイエス様は、からだなる兄弟姉妹を通してお働きになり、ご自身を明らかにさせたいと思っておられます。

5. 第五の大切な事実は、多くの兄弟姉妹が実際は戦いに役にたたない、或いは戦う能力がない、ということです。

先に読んでいただきました申命記 20 章です。4 節から 9 節まで読んでいくと分かります。戦いに参加すべきでない四種類の兄弟姉妹について述べられています。即ち、彼らは失格者とされたのです。それらの兄弟姉妹は家へ帰らなければならなかったのです。そのような兄弟姉妹もまた、主なる神の選ばれた民に属し、主はご自身を彼らの神でもあると言われ、またご自身を勝利者として現わされたのです。主はご自身の民を、兄弟姉妹一人一人を用いたく思っておられ、ご自分の勝利が明らかにされることを望んでおられます。しかし、そのような失格者たちをお用いになることはできません。

* 第二に、戦いに参加する合格の要素、また失格の理由についてここに書かれています。合格のためのいろいろな要素がいかなるものであり、失格に導くものがいかなるものであるかについて書かれています。三つの点に触れたいと思います。

1. すべてを主にささげない者は失格者です。

申命記 20 章 5 節

つかさたちは、民に告げて言いなさい。「新しい家を建てて、まだそれを奉獻しなかった者はいないか。その者は家へ帰らなければならない。彼が戦死して、ほかの者がそれを奉獻するといけないから。」

聖書を読むとその当時は、新しい家は、「主に聖められる」という習慣があったことが分かります。即ちその新しい家は主のものであり、主が自由にお用いになることができたのです。この家、即ち全家族とともに、すべてを主の御手にささげなければ、戦いに参加する資格が与えられなかったのです。このことは、いったい私たちに何を語っているのでしょうか。それは、私たちイエス様を信じる者が、「神の家」、「主の住まい」、そして「聖霊の宮」である、ということの意味しています。

よく引用される箇所をもう一度読んでみましょう。

コリント人への手紙・第一 6 章 19 節、20 節

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あな

たがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

すべてを主にささげ尽くさない場合には、その者は家へ帰らなければなりません。まず、その人の家、また家族が主に聖められて初めて、戦いに参加する資格を与えられるのです。今読みました箇所の中に、『あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。』『忘れたのですか。』『いったいどういうことですか。』『あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。』と。

すべてを主にささげ尽くすことこそ、戦いのための資格として要求されています。それは、私たちの場合には、自分の自己本位の生活に死ぬことを意味しているのです。「あなたがたは、もはや自分自身のものではない」。言葉を換えて言えば、この戦いに参加する資格を与えられる者は、バプテスマのヨハネのように、「イエス様は栄え、私は衰えるべきである」と。

私たちの体、私たちの手足、すべては主の器となるべきです。家全体のすべての部屋は、主のものであり、主にささげられるべきです。私たちのすべての肢体、即ち私たちの心、私たちの意思、私たちの考え、耳、手、足、唇、これらのものすべては主にささげられることによって、主の器となるべきです。その時初めて、私たちは戦いに役立つ者となり、戦う能力を持つ者となります。主が、私たちの心の奥底を探り知ることがおできになりますように。

2. 何の実も結ばない者は、失格者となります。実を結ばない信仰生活はあり得ません。

申命記 20章6節

「ぶどう畑を作って、そこからまだ収穫していない者はいないか。その者は家へ帰らなければならない。彼が戦死して、ほかの者が収穫するといけないから。」

とあります。

パウロは、ガラテヤにいる兄弟姉妹に、次のように書きました。

ガラテヤ人への手紙 6章7節から9節

思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。善を行なうのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取るようになります。

ガラテヤ人への手紙 5章22節、23節

しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。

とあります。

この22節を考えながら、私たちは自分の日常生活がいったいどういうものであるかを、反省する必要があるかもしれません。

このガラテヤ書5章22節には、御霊の実として九つのものが挙げられています。

御霊の実は、「愛」です。

もちろん人間の愛ではありません。パウロは「私たちに与えられた聖霊によって神の愛が私たちの心に注がれている」。いつか注がれる、ではありません。もう与えられている、と。この「主の愛」は、私たちの日常生活の中でも生き活きと働くことができているのでしょうか。

御霊の実は、「喜び」です。

ヨハネの福音書 15章11節

「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにある、あなたがたの喜びが満たされるためです。」

とイエス様は言われました。「イエス様の喜び」は、考えられないものです。

御霊の実は、「平安」です。

イザヤ書 26章3節

志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです。

困難と問題に満ちている日常生活の中で、私たちの絶えざる体験となっているのでしょうか。

御霊の実は、「寛容」です。

パウロは、当時の信じる者に書いたのです。

エペソ人への手紙 4章32節

お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。

キリストが赦されたように、同じように互いに赦し合いなさい、と。もちろん人間の力によってできるものではありません。ですから主を必要とします。幸いにいつも「御霊の実」と書いてあります。人間の努力の結果ではありません。

御霊の実は、「親切」です。

コリント人への手紙・第二 10章1節前半

さて、私パウロは、キリストの柔和と寛容をもって、あなたがたにお勧めします。

この点において、私たちも「イエス様に似た者」とされているのでしょうか。

御霊の実は、「善意」です。

使徒の働き 11章24節

**彼はりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大ぜいの人
が主に導かれた。**

とあります。当時のバルナバは、立派な人物だったようですが、原語を見ると、「善意」ということばが用いられていることが分かります。バルナバは、主によって豊かに用いられた器で、彼を通して「大ぜいの人を主に導かれた」とあります。私たちも、バルナバに似た者とされ、私たちについても、バルナバと同じことが言われるのでしょうか。

御霊の実は、「信仰」です。

ルカの福音書 17章5節

使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増してください。」

私たちの場合はどうでしょうか。私たちの日常生活も、主に対する幼子のような信頼、また、主の呼びかけに対して、はっきりとした意識を持って行動する生活として特徴づけられているのでしょうか。

御霊の実は、「柔和」です。

コロサイ人への手紙 3章12節

それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。

と、使徒たちはよく当時の信じる者を励ましたのです。私たちも、このような謙遜な態度をもって人に接しているのでしょうか。

御霊の実は、「自制」です。

パウロは、

コリント人への手紙・第一 9章25節

闘技をする者は、あらゆることについて自制します。

と書いたのです。この点について、私たちの場合はいったいどうでしょうか。

失格者について、今まで話したことをまとめてみると、

- 1．主に全てささげきっていない兄弟姉妹は、戦いに参加することのできない失格者であり、
- 2．日常生活の中に「御霊の実」を見出すことができない者もまた失格者であって、戦いには役立ちません。

3．定められた義務を軽んじる者は、戦いに役に立たない、とあります。

もう一度、申命記に戻りまして、

申命記 20章7節

「女と婚約して、まだその女と結婚していない者はいないか。その者は家へ帰らなければならない。彼が戦死して、ほかの者が彼女と結婚するといけないから。」

聖書を読むと、その当時婚約した者は約束を守って結婚しなければなりませんでしたが、それから一年間は兵役の義務から解放されていました。要するに、自分の約束を守らない者は主に用いられない、ということです。

私たちもまた義務を持っているのであり、それは、まず「主に対する義務」、それから「他人に対する義務」でしょう。

「主に対する義務」とは、どういうものなのでしょうか。

主に対して、約束したことを守ること。

申命記の23章21節を見ると、次のように書かれています。

申命記 23章21節

あなたの神、主に誓願をするとき、それを遅れずに果たさなければならない。あなたの神、主は、必ずあなたにそれを求め、あなたの罪とされるからである。

とあります。私たちは、主に何かを約束し、それを守らなかったことがあるのでしょうか。おそらく私たちは、主にすべてをゆだね、「主のご自由になさってください」と約束したにも関わらず、わがままな気持ちを捨てきれないというような経験を持っているでしょう。けれど、これは主がそのままにはさせておくことのできない罪です。

主こそ、私たちの生活の中で最優先されるべきお方である、ということ。

山上の垂訓の終わりに書いてあります。

マタイの福音書 6章33節

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」

福音を宣べ伝えること。

マルコの福音書 16章15節後半

「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」

とはっきり書かれています。これこそが、すべてのキリスト者の果たさなければならない義務そのものです。

この主に対する三つの義務を果たすことが出来ない者は、主はお用いになることが出来ませんし、また、戦いに参加する資格も無い者です。

しかし、主に対してだけではなく、人間に対しても義務を持っています。

「人間に対する義務」とは、どういうものでしょうか。

「和解」が大切であるということ。

マタイ伝5章23節は、本当に大切なみことばです。日曜日の集会のパン裂きの前に、いつも一人の兄弟が立って話します。「洗礼を受けても、受けていなくても関係ありません。主のものになったのは大きい」。しかし、だいたい忘れられていることがあります。救いの確信があっても、光のうちに歩まなければ。罪を隠すなら、本当はあずかってはいけない、ということです。

マタイの福音書 5章23節、24節

「祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。」

言うまでもなく、自分の力でできるものではありません。ですから、主に頼らなければいけないのです。わだかまりが解決されない限り、主はその人をお用いになることができません。

「全き真実」が大切である、ということ。

ローマ人への手紙 12章17節

だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。

主は、あらゆる嘘、あらゆる偽り、あらゆる偽善を憎まれます。それに対して「真実であること」は、常に主によって勧められています。

「他の人の重荷を担う」こと。

ガラテヤ人への手紙 6章2節

互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。

イエス様のからだの肢体として、主のものである私たちはすべて、お互いにいたわり合い、助け合うべきです。このように、主に対して、また他人に対しての定められた義務を軽んじ、その義務を果たすことをしなかったり、おろそかにすることは、戦いのための失格者です。

今まで、失格者についてお話したことをまとめてみましょう。

- 1．主にすべてささげきっていない者は、戦いに参加するための失格者です。
- 2．日常生活の中に「御霊の実」を見出すことができない者も、また失格者です。
- 3．定められた義務を軽んじる者は、戦いに役に立たないということです。

4．恐れたり、臆病な心を持つ者は、戦いのための失格者です。

ですから、先に読みました、

申命記 20章8節

つかさたちは、さらに民に告げて言わなければならない。「恐れて弱気になっている者はいないか。その者は家に帰れ。戦友たちの心が、彼の心のようにくじけるといけないから。」

戦いに参加できるための前提は、断固たる決意、また勇気です。臆病や心配が支配すると、そのような者だけが駄目になるのではなく、周りの人々もみな、臆病風に吹かれてしまうのです。ですから、恐れてはいけません。臆病や勇気の無さは、私たちの主に榮譽を帰することができません。私たちの周囲の者を損ないます。

- ・主は、みことばを通して、日々私たちに語りかけておられるのでしょうか。
- ・私たちは、「主の御声を聞きたい」という切なる願いを持っているのでしょうか。
- ・主の御声に従う備えが、できているのでしょうか。もしそうなら、恐れはすべて消え失せてしまいます。

最後にもう一箇所読んで終わります。自分のために与えられた主のみことばであると思ふと、非常に幸いと思えます。

イザヤ書 41章10節

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

了